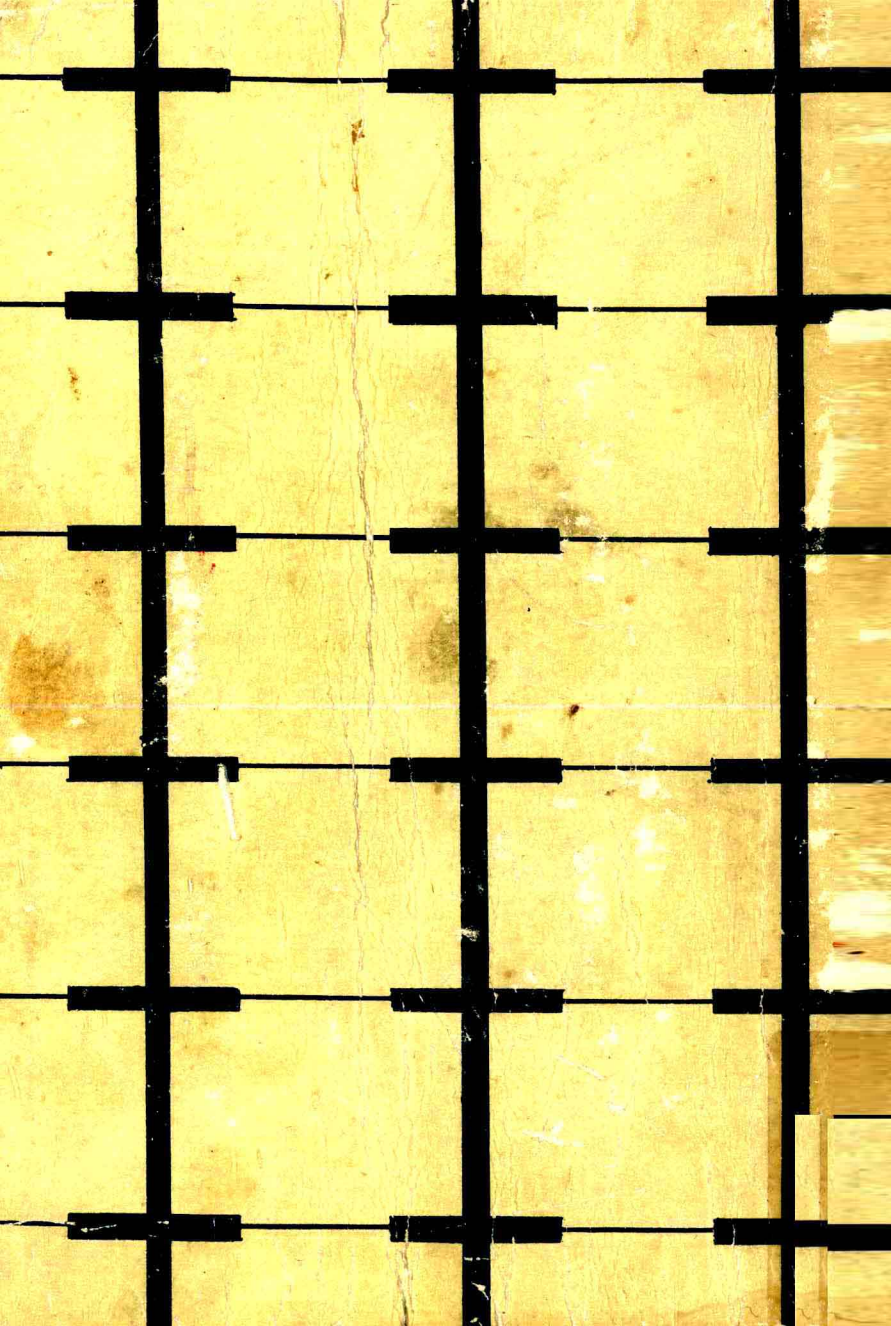

極楽とんび（上）

宮本幹也

極楽とんび

上巻

¥ 260（地方価 ¥ 270.）

昭和32年7月15日 発行

著作者 宮本幹也

発行者 矢貴東司

印刷者 東英印刷株式会社
（北山 茂）

発行所 桃源社

営業所 東京都千代田区神田神保町1—30
電話二九局 四九五一，二番
振替口座 東京六四三五一番

© 1957

目

次

極楽とんび

上巻

男と酒……七
夜の歌……四六
力とぶ……八三
悪の巣……一一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

との地球……一五二
川　蟬……一九五
人　情……二二六
別世界……二五六

裝幀　岡本爽太

極楽とんび

上巻

男の酒

一

永代橋からヒヨーロヒヨーロ
ビールかチユウか泡盛か
真赤な夕陽も笑つてら
極楽とんびがヒヨーロヒヨロ

誰がつくつた歌か知らないが、貫八が通ると、子供たちが声をそろえてはやし立てる。
極楽とんびと仇名のある貫八は今日も有り金全部飲んでしまつていい調子で永代橋にさしかかつた。
子供たちの歌もだいぶ軽蔑的な響きを持つているのだが、御本人は少しも苦にならないどころか、逆に自分の行進曲ぐらいの心算でいるから世話はない。
背丈は五尺八寸、ひよろ長くて何となく飄々としているが、よく見ればいい男前である。長鈎を持たせて筏に乗せたら、深川の川並（筏師）の中でも彼の右に出る者はない程の名人だ。
「酒さえ飲まなきやいい男なんだけどねえ」
と、親方のお内儀さんがよくこぼすが、生来ののんき者で酔つ払うとどこへでも寝てしまうし、金のある内は少し

も働かない。そこへ持つて来て、
「女嫌いと来てるから始末が悪いわよ」
とは深川の姐さんたちの評判である。
「真赤な夕陽も笑つてら、極楽とんびがヒヨーロヒヨロ」
貫八は自分でも口の中でつぶやきながら、隅田川を見るともなしに眺めた。子供の頃から眺めている景色だが、いつ見ても飽きない大川の流れである。まるで自分のおふくろの姿でも眺めるような気持だ。
「有難えじやねえか、戦争に負けても戦災に遭つても、隅田川だけは変らねえぜ。べら棒め」
鼻の頭をこすり上げた。と同時に誰かに話しかけたい欲求にかられて、貫八はあたりを見回した。
しかし橋の上は自転車や自動車やそれから電車がひつきりなしに動いていたし、それから歩道を歩く人々も何となく忙しげで、貫八の相手をしそうな者は一人もいなかつた。何しろ昼間から飲んでいる貫八は何となく自分だけが異邦人のような孤独感にとらわれていた。
「おーい！」
誰にともなく声をかけながら、ヒヨーロヒヨロと歩いて行くと、橋の真中程に、一人の若い娘が立つているのが見えた。
「おや？」
と思つたのは、その時娘の片足が橋の欄干にかかつたからである。
「身投げかな？」
身投げにしては昼間という時間が何となく奇妙である。しかし、娘は裾が割れたようなタイトのスカートに白のブラウスを着て、靴の代りに草履をはいていた。この草履が、何となく身投げというのにぴつたりしていた。
そういう貫八の方も洋服に草履といういでたちだつたが——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「あッ！　待ちなよ、な、何をするんだ！」
貫八は思わず叫びながら走つた。何とその時、貫八の予感通りに娘は欄干に両足をかけてまさに飛びこみの姿勢を取り始めたではないか。

二

「待つた、待つた！」
ちよつと芝居がかつたいい方だつたが、意識していつた訳ではない。
貫八は夢中で叫び、飛びついていた。
「なンてことをするんだ！」
娘の体を背後から抱き止めた瞬間、貫八はどきりとした。何と自分の手が娘の豊かな胸の隆起を摑んでいたからである。
「放して！」
といいながら、娘は反射的に貫八の腕の中でうずくまつてしまつた。
娘は袖の短い薄いブラウスを着ていて、しかも貫八の手に体温が感じられたところを見ると、ゴム製のニセモノではなく正真正銘のボリユウムのある乳房だつたのだろう。
「ひどいわ」
と彼女は自分の胸を押えてうらめしそうに貫八を見上げた。
「すまねえ」
と、助けた方の貫八が頭を掻いた。
「摑むつもりで摑んだ訳じやねえんだ。夢中でその……」

「ひどいわ」
と娘がまたいつた。
貫八はその時始めて娘が十七か八の若さで、しかも大きな眼をしていて中々美しいことに気がついた。
スカートの下は素足で、ちびたサンダルを突つかけていた。
「だが何だつて死ぬ気になつたんだい？」
と聞くと、
「ひどいわ」
とまたいつた。
「冗談じゃねえ、俺が助けたのがひどいつていうのかい？」
「だつて、あたい、オツパイを摑まれたことなんかないんだもの。まだ変だわ」
「おいおい」
と貫八はあきれていつた。
「死ぬつもりの人間がよ、オツパイをどうのこうのつていつてちやおかしいぜ」
「おかしかつたら笑つたらいいわよ」
とまた欄干に足をかけそうになつた。
「な、なんてえ真似をするんだ」
と、貫八はあわてて抱き止めたが、今度は気をつけてお腹のあたりに手を廻した。
「俺の目の前で死なせてたまるかい。ねえちやんよ、俺は何遍だつて邪魔するぜ。その内にはお巡りだつて飛んで来らあな」
「いやだわ」

と娘は眉を寄せた。
「助けられるのがかい？」
「違うわよ。お巡りよオ。あたい虫が好かないのよ、お巡りつて」
それから急に、
「おじさん」
と開き直つた。
「あたいのこと、相談にのつてくれる？」
「何かいうにいわれねえ身の事情てえのがあるんだな。よし来た。乗りかかつた舟だ。乗つてやろうじやねえか」
と貫八がいうと、
「変な乗り方しちやいやよ」
と娘がいつた。

三

「おじさんの家、どこ？」
「おじさんはよして貰いてえな。おじさんといわれる程の年でなしか」
「でもおにいさんじや少しヒネてるわよ」
「口の悪い娘だな」
「ふふふ、ごめんなさい、いのちの恩人に対して……」
そのくせあんまり感謝しているふうではなかつた。
「恩人といわれると照れらア。俺は生れつきオダテに乗る方でなア。ところで、俺の家は木場だが実をいうと、まだ

飲み足りねえんだ。浅草に知つてるところがあるから、出かけるところよ。一緒に行こうじやねえか」
「浅草？」
ちよつと考えていたが、娘はうなずいた。
「いいわ、行つても。何に乗つて行くの？」
「先祖代々のテクシーよ」
「あら、歩いて行くの？　ずいぶんあるわよ」
「なあに、大したこたあねえ。これから浜町河岸へ出て、ぶらぶら河風に吹かれながら柳橋から両国、蔵前、厩、駒形と四つの橋を眺めながら行くのもオツなもんだぜ」
「おじさん、タクシーに乗るお金ないの？」
「自慢じやねえが一円の金も持つちやいねえ。さばさばしたもんよ、人間、金にくよくよするようじや、とてもじやねえが一人前たあいえねえ」
鼻の頭をこすり上げて威張つたが、ふと気がついて、
「ねえちやん、おめえはまさか金に困つて身投げしようとしたんじやあるめえな？」
「直接の原因じやないけど、でも結局は金だわア」
何となく金だわアといつた彼女の言葉には哀愁がこもつているように感じられた。
その時、娘は何と思つたのか、急に立ち止まつて、
「あたい、よすわ、行くのは」
といい出した。
「どうしたい？」
「だつて、一文なしのおじさんのとこへ行つたんじや、悪いもの」

「おい、こら」
と貫八は少し大きな声を出した。
「俺の前で遠慮して見ろ。怒るぜ、俺あな、木場でも有名な遠慮嫌いよ。一文なしでもねえちやんにお茶ぐれえ飲ませるこたあ出来るぜ」
「おじさん、あたいは今夜泊まるとこがないのよ」
急に泣き声になつた。
「それなのに一文なしのおじさんのとこへ行つたんじや二人ともスルメみたいに干乾しになつちやうわよ」
「泊まるとこがねえつて？　それじや行くとこも家もないのか？」
「ないわけじやないけど……行けば、あたいは……」
また下を向いた。そしてもじもじしながら、
「言えないわ」
「ふーん」
と貫八は唸つた。
「俺は女は嫌いだが、そう聞いちや黙つちやいられねえ。どうあつても俺の家へ連れて行く」
「だつて……」
と娘は尻ごみした。
「だつて、おじさんの家にや奥さんがいるんでしよ」
「冗談いうねい、はばかりながら極楽とんぴだ、のんきなもんよ、女つ気は猫だつていねえよ」
いつたかと思うと、娘の手首をつかんで歩き出した。

四

貫八が歩くにつれて娘は観念したらしく、
「おじさんは変ってるわね」
といいながらついて来た。
「町の連中は変り者だつていつてるようだが、俺は別に変つてはいねえ心算だ」
と貫八は澄ましていつた。
「そうかしら、おじさん、年は幾つなの？」
「はつきり覚えちやいねえが、三十はだいぶ過ぎてるらしい」
他人ごとのようにいつた。
「それなのにワイフがいないなんて、やつぱり変人よ。それともワイフに逃げられたの？」
「冗談いうねえ、サイフだのワイフだのつてものには初めつから縁がねえんだ」
「おじさんまさかインポじやないわね」
「え？　今、何ていつた？」
「何にもいいやしないわよ」
「いつとくが、俺は餓鬼の時から勉強は嫌いでな。アメ公の言葉を使われると、そくそくツとするんだぜ」
「やつぱり変つてるわよ」
と、娘はいつた。
隅田川をくだつて行く水上バスのお客が、岸を歩いている二人にむかつてどんな気がしたのか手を振つた。
「よう！　いい気持かあ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook